生と死の境界線

〔最後の自由〕を生きる

岩井寛〔口述〕
松岡正剛〔構成〕

講談社

見〔口述〕

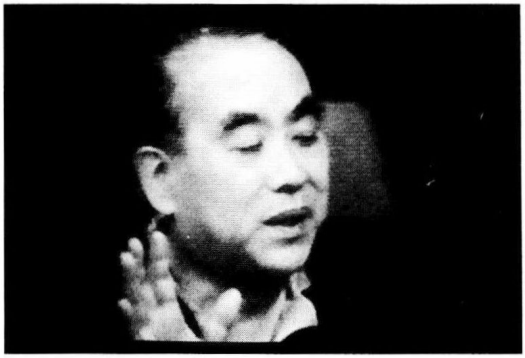
生と死の境界線

松岡正剛〔構成〕

講談社

生と死の境界線
昭和六三年六月一〇日第一刷発行　昭和六三年八月二十日第三刷発行
定価——一九〇〇円
口述——岩井寛　構成——松岡正剛
©Isami Iwai, Seigo Matsuoka 1988 Printed in Japan

発行者——加藤勝久　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目三—三　郵便番号二二—〇二　電話〇三—九四五—二二一
装幀者——杉浦康平＋谷村彰彦
印刷所——株式会社廣済堂＋凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
ISBN4-06-203450-6(0)
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてにお願いいたします。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

我伏病床、思事有多々
敢死不難、夫難生以意味
死通空　無也空無、
空合萬象有、衆有空
故空

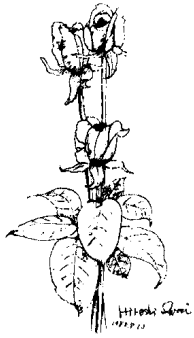
文字書きあらず　空のみ目
見えざる非し

病得て深めつれたり
生死の底

鬼神かとまりアそとともに苦み
たるが故に聖なり

死を認めかばく結ぶる

夫婦の生



はじめに

松岡正剛

私は本書をどこから始めるべきなのか、ずいぶん迷いつづけた。また、どのように一冊の本にすべきなのかを、もっと迷いつづけた。どのように迷い、そしてどのようにささやかな決断をしたかについては、おいおい本書の中であきらかになるとおもう。しかし、それでもなお、この冒頭で、自分がまだ何も納得していなかったのだということを告白せざるをえない。

一九八六年五月二十二日未明、岩井寛先生が亡くなった。全身におよぶニューロ・エンドクライノーマというガンによるものだった。

本書は、ガンに冒され、ほとんど目が見えなくなった岩井先生が、その年の二月から死ぬ直前まで語りつづけた話の記録をもとに構成されている。構成の方法についてはとくに言うべきことはない。私にはこれが最上であるとおもえる方法が見つからなかったからである。ただ、二つのことを前置きしておく。

ひとつは、四十時間をこえるテープの話のすべてを紹介できなかったということ、もうひとつは、本書では故人のことをあえて「先生」と書かせてもらったということだ。全面収録できなかったことについては、本書の制約下で省略可能な個所だけの削除であることを明言しておきたい。対話部分の修正もほとんどない。また、「先生」という表記については、本書を公表する以上（それが遺志だったの

だが)、私が故人にひとかたならぬ敬意を抱いていたことを、別のどんな表記であらわすことも不可能だったという説明で御寛恕いただきたい。

本書には、一人の人間が死の直前まで話しつづけた言葉がぎっしりつまっている。そこにはガンという特異な病状に関する詳細な観察もあれば、生い立ちの秘密をふりかえった告白の一章もある。また、今日の代表的な精神医学者としての学問的構想や非妥協的な宗教論や日本文化論もふんだんに含まれている。それらはいずれもすこぶる興味深く、とくに精神科医を職業とする者が死を目前にして自己の意識を赤裸々に覗いた記録としては、他に類例がない内容になっている。

したがって、本書からは標題から予想される以上の多くの真剣な示唆が汲みとれるにちがいない。私自身、実際に先生の話を聞いていた時からテープ再生を経て、何度も成稿を読んでいる段階にいたるまで、実に多くのことを学び、考えさせられてきた。その一端の感想は本書の会話の間に多少は挿入しておいたが、とてもまとまりきれるものではなかった。

しかし、いまここで強調しておきたいことは、本書に一貫して流れている断固たる高揚を、そのような〝成果〟によっては説明しきれないのではないかということである。なぜこんな強調をしておきたくなっているかということは、本書を読み進められるうちにすぐあきらかになるであろうとおもわれる。

もうひとつ言っておかなければならないことがある。本書はいわゆる〝闘病記〟ではないというこ

とだ。理由はいくつかある。まずなにより、岩井先生自身が「僕はガンと闘っているわけではない」と断わっているということがある。

次に、ここに収録されているのは、「生と死の境界線」を凝視しつづけた記録であり、その境界線上で「意味を実現する」とはどういうことなのかを身をもって実験した記録だということである。

だから、本書は告白録ではない。闘病記でもない。むしろ実験書とでもいうべきもの、かつてのどのような範疇の記録にもあてはまりようのない実験報告集なのである。ただ私は、それが何の実験だったのかを正確に言えるものをもちえない。いま私に言えることは、その回答こそ、本書を通して岩井先生が探求しつづけたことだったろうというだけである。

われわれはいま、「生」にあり、われわれはいま、「死」にいない。しかし、われわれがいまの「生」にありつづける者でないことは誰もが知っている。本書は、この尊厳に満ちた大いなる分断に、驚くべき連続をもちこもうとする一書でもある。われわれがふだんは放置しかねない勇気を、「生」の側にも「死」の側にも、等しくもたらそうとする一書でもある。

いや、ここから先の感想は、本書の進行とともに始まるべきものだろう。どうか、時間が充分にある一日に、ゆっくりと(ただし順を追って)お読みいただければとおもう。そして、この名状しがたい記念碑となるであろう一冊を、心のどこかにしばらく置いていただきたいと願うものである。

はじめに……5

◉

I

ガンと失明の間――目が見えなくなった！……12
命の勘定――どのくらい生きられるのか……25
死とロマンの誘惑――「いま」と「あと」……34
意味の実現――ガンと闘うのではない……43
食卓を囲んで――僕の爪を見てください……56

◉

II

曲がった足とカルマ――異様な幻視体験(1)……66
体のなかの反乱分子――病床からの電話(1)……76
苦痛と精神――過去と現在をつなぐ……88
自分をさかのぼる――原罪意識とアイデンティティ……104
学問的自己――ホリスティック・サイコセラピー(1)……117
人間の成長――ホリスティック・サイコセラピー(2)……137
飽食文化との対決――僕は日本人である……163
あるがままの精神医学――森田療法の周辺……185

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

◉

III

空無の世界——近づく死の彼方へ……202
エロスとタナトス——パンドラの函をあける(1)……226
通りすぎた女性たち——パンドラの函をあける(2)……246
子供の死と母の死——パンドラの函をあける(3)……273
交友の記憶——僕を励ましてくれた人々……285

◉

IV

蝕まれてゆく体——ニューロ・エンドクライノーマ……298
病気の原因と行方——夫婦の対話から……309
影法師と二本の指——異様な幻視体験(2)……328
正常と異常——神経ブロックの森の下で……343

◉

V

植物人間への反抗——まだ、あきらめてはいけない……372
あしたは死の話——病床からの電話(2)……393
脳と恐怖——死についての遠い質問……400
最後の自由——僕の意識を確かめてはじ……413
部屋にたくさんの人がいる——病床からの電話(3)……435
臨終の日——口述は続いていた……450

◉

あとがきに代えて……474

I

ガンと失明の間――目が見えなくなった！

岩井寛先生との話が始まったのは冬の終りだった。その五ヵ月前、先生は西新橋の慈恵医大病院で、腹腔内S状結腸部に発生していたガンの摘出手術を終えていた。手術は成功したかに見えた。いや、たしかに腹腔内のガンは摘出できたはずだった。しかし、後に詳しくあきらかにされるように、ガンは死んでいなかったのである。苛酷な死を予告されていたのは先生の方であった。

一九八六年二月上旬のこと、岩井先生から電話がかかってきた。いつもの通りの強くよく響く声である。「かねてから迷っていた件を、やっぱり松岡さんにお願いすることにしました」。かねてからの件とは、岩井先生の話を私が収録しつづけてほしいという件である。目があまり見えなくなっているせいだった。

私はすぐさま「お役に立てるならよろこんで」と答えたが、自分の体を遠雷のような音が走り出したのがはっきりとわかった。すでにいさみ夫人から、先生のガンが治りそうもないことを知らされていたからだった。

こうして二月二十三日、第一回目のテープ収録が始まった。日曜日の朝だった。私は小さな

テープレコーダー二台と大学ノート一冊を持って、吉祥寺の岩井宅を訪れた。かつて何度も訪れた住所と同じところではあったが、すっかり改築された家に入るのは初めてだった。まだでき上がって二ヵ月もたっていない家である。

話には二階の広く茶色い書斎があてられた。戸外には陽差しはあったが、寒い一日だったので、懐かしいガスストーブがついていた。先生は着物を着て、ソファの隅にゆっくりと坐った。着物は体の痛みを隠すかのように少し着くずれていた。そんな帯の締め方をする姿を見るのは初めてだった。

あらためて二人で向きあってみて(それまでは階下で夫人を交えて雑談をしていた)、さて何から切り出すべきなのか、私は突如として自分が何の方針ももっていないことに気がついた。けれども、テープはまわりはじめていた。そして、そのテープはそのままずっと先生の死までまわりつづけることになったのだ。

まずは、その冒頭の収録部分をお読みいただきたい。当時の先生の体の状態がよくわかっていただけるとおもう。その後、先生の体は一週間単位に、まさにテープを入れ替えるたびに、確実に悪化に向かっていったのである。

――……ガンの手術が終ってからのこと、現状の状態をまずお話しいただけますか。

岩井　手術が終って(一九八五年九月二日)、半月ぐらいたってから突発性難聴になったわけです。突発性

難聴というのは、いまのところ二十何種類の難治疾患のうちに入ってまして、これは原因がいまだに、ウイルス説とかストレス説とかいろいろあるわけだけれども、不明なわけです。

――ええ。

岩井　ある日起きてみたら、ものすごく耳鳴りがして、突然に左の耳が聞こえなくなってしまったんです。それは、腹腔内腫瘍で痛みをこらえて、そしてそれが終った後に襲ってきた突然の、何ていうのかな……。

――第二波ですか。

岩井　ええ、第二波だったんですね。そのときには、ああ、これで片耳でしか音楽が聴けない。音楽の世界とはこれで決別というふうに思ったわけです。二、三〇パーセントしか治らないんです、われわれの年代になった人は。

そういう音の世界との決別があって、それからしばらくして――正確な日にちはワイフの手帳に書いてありますが(九月十七日)、それからしばらくしてから、今度は突然に左目が見えなくなったわけです。白一色になって。そして、その翌日に右目が見えなくなったということで、(慈恵医大病院の)眼科の教授に診てもらいましたらば、葡萄膜炎ということでね。

われわれの眼球というのは、結局、角膜があって、虹彩があって、その後ろもずっと葡萄膜で覆われているわけですね。その中にレンズの硝子体があり、その硝子体を入れてある部屋があるわけで、そこに眼房水という水が満たされている。その眼房水が濁っちゃったわけです。硝子体の混濁だったら手術で治るけれども、眼房水の混濁というのは、ちょっと手術できないわけです。結局、その水が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co